

# 鼻の魔術師サルマン・ラシュディ 『真夜中の子供たち』における生/死を揺らがす嗅覚的情動

田口嵩人

## 序

サルマン・ラシュディの『真夜中の子供たち』は、ギュンター・グラスの『ブリキの太鼓』、ガルシア・マルケスの『百年の孤独』を彷彿とさせる魔術的リアリズムの手法を用い、サリームの「真実を嗅ぎ取る」鼻を筆頭に、超自然的な嗅覚が重要な役割を果たす。本発表では、本作にある豊かなにおいとおいがもたらす情動に焦点を当て、近代公衆衛生観に基づく清潔と不潔、その延長上にある健康と病、さらに生と死の二項対立を攪乱するにおいの存在を明らかにする。そして、イヴ・K・セジウィックの「修復的読解」に依拠し、テキスト上に散見した一見すると無関係なおいの情動が、その生と死の二分法を揺らがすにおいを補填し修復する機能を検証する。

## 情動、修復的読解、嗅覚

『タッチング・フィーリング』にてイヴ・セジウィックは、ポール・リクルの「懐疑の解釈学」の系譜に顕著な、隠された権力や暴力の暴露に過度に固執したポスト構造主義的思考の習慣を批判しつつ、そのような「パラノイア的読解」に基づいた「強い理論」に対して、「修復的読解」に基づいた「弱い理論」の可能性を模索している。彼女は、メラニー・クラインの乳児期における精神分析モデルである「妄想一分裂ポジション」に前者パラノイア的読解を、「抑うつポジション」に後者修復的読解を、各々なぞらえて議論をする。乳児が母を乳房という部分対象としか認識できない状態では、乳児は対象や自己を「良い部分」と「悪い部分」に分裂させ、自身を脅かしうる「悪い」対象へのパラノイア的な攻撃性を帯びる。類似的に、パラノイア的読解は知への不安から強くネガティブな情動に固執し、驚きを否定し、暴露に信頼を寄せる。対して、成長するにつれ、乳児は母が必ずしも欲求をすべて満たす存在ではないと知り、かつて「悪い」対象として攻撃したことへの罪悪感や後悔から抑うつ状態に至り、母の「善」と「悪」の部分を統合し全体として組み換えようと修復にエネルギーを使用する。修復的な読解は、パラノイア的読みが否定するポジティブな情動をはじめとした排除されたものを寄せ集め、全体の修復を試みます。肝要なのは、パラノイア的懐疑が目を逸らした情動による驚きをポジティブな驚きとして肯定的に歓待してはじめて修復・補填はなされることだ。ただし、修復的な読みは、パラノイア的批評が明らかにしたものをご否定せずあくまでそれを中心に置きつつも、その傍らで無関係とされる情動を緩やかに繋げ、共振させ足し算的に増幅させ、暴露された中心の欠如を補う役割を担う。

なおいと修復的読解の接続を論じるにあたって、ヴァルター・ベンヤミンが論じるなおいと記憶との関連性、そしてなおいによる「慰め」の効力に着目する。「複製技術時代の芸術作品」でベンヤミンは、近代という歴史的転換点においては、観照を可能とする視覚のみによる知覚には限界があると主張し、「歴史の概念について」では代わりに、瞬間的にさっと過ぎ去り、再現することのない一回性を携えた歴史のイメージを知覚するのは、触覚をはじめとした「下位」五感であると論じている。「ボードレールにおけるいくつかのモチーフ」では、ある匂いは過去の同種の匂いを参照し、知覚した主体に過去の記憶を想起させ、そのイメージの存在する場へとその知覚者を遡及的に引き戻す性質を指摘している。さらには、その数々の記憶には「慰め」の力があるという。その例としてベンヤミンは、『失われた時を求めて』でブルーストの語り手がふやけたマドレーヌの匂いによる時間遡行のエピソードを例に挙げ、これはセジウィックが挙げる修復的読解の実践例でもある。ふやけたマドレーヌの香りから生じる情動がブルーストの語り手に数々の過去の記憶を思い起こさせ、複数の真実として現在によみがえり、幾度も幾度も語り手を自己補完的に慰め、ついには喜びをたらす。これこそがなおいの情動がもたらす修復作用といえる。

## 〈未亡人〉への嗅覚的抵抗：「スパイスで炒められた柔らかい何か」のにおい

本発表で論じた『真夜中の子供たち』にある多くのにおいのなかでとりわけ重要な一つを紹介すると、〈未亡人〉の強制断種政策へと抵抗するにおいが挙げられる。

『真夜中の子供たち』は〈未亡人〉が実施するサリームそして真夜中の子供たちを対象とした強制断種政策をもってクライマックスを迎える。捕縛され個室に閉じ込められたサリームは嗅覚を用い、仲間たちが断種手術の犠牲となり、死にゆく様を感じ取る。そして、語り手は「あるにおいを語らなければならない」という。

Yes, you must have all of [the smells]: however overblown, however Bombay-talkie-melodramatic, you must let it sink in, you must see! What Saleem smelled in the evening of January 18th, 1977: something frying in an iron skillet, soft unspeakable somethings spiced with turmeric coriander cumin and fenugreek . . . the pungent inescapable fumes of what-had-been-excised, cooking over a low, slow fire. (614, イタリクスは著者, 下線は発表者)

この「柔らかな言葉に表せない何か」とは取り除かれた真夜中の子供たちの精巣と子宮を指し、それらはターメリックなどのスパイスで炒められる。このにおいては、一方では再生産機能をはく奪された死のイメージ、他方では食欲を促進することで生命力を増加させる生のイメージが混在する。後者について補足すると、本作に登場するスパイスの香りは、語り手サリームが聞き手パドマに語るピクルス工場に漂うにおいて、彼の料理するチャツネのにおいでもある。多様な食材と香辛料を混ぜ合わせて作られるチャツネにちなみ、ウルドゥー語などの多種多様な言語の語彙や、映画や食などのインド文化を英語に取り込むラシュディの文体は、「言語のチャツネ化」といわれる。これには支配者への言語的抵抗の意味合いが強くあり、このスパイスのにおいに〈未亡人〉への抵抗の意思を読み取ることもできるだろう。「スパイスで炒められた柔らかな何か」の中に込められたスパイスのにおいは、サリームが嗅ぎ取った真夜中の子供たちの生きる意思が感じられるポジティブな情動を明らかにする。

### 修復的読解試案一に、記憶、語り一

「スパイスで炒められた柔らかな何か」のにおいは、緊急事態宣言時の強制断種というインドの歴史的悲劇であり、ラシュディが本作の中心的事件を感覚的に表象しようとした試みである。ここまでをパラノイア的な読みの実践として、次に、このにおいをあくまで本作の中心にあるにおいとしたうえで、テキスト上に散りばめられた多くのにおいの情動がいかにかその中心を補填・修復するかを検証する。

さきに述べたように、修復的な読みでは、暴露された中心的な情動の傍らにある多くの情動の緩やかなつながり、それらの共振、足し算的な増幅による修復の役割に着目する。そのためには周縁にある多くの情動を俯瞰的に眺める必要がある。『真夜中の子供たち』とにおいの文脈でとりわけ積極的に論じられる『失われた時を求めて』とを *smell, odor, scent* などにおいの語彙が登場する回数を比較したところ、本作のにおいは 253 回登場し、『失われた時を求めて』では 256 回であることが判明する。においの情動がプルーストのテキスト同様に豊かだといえる。

続いて、本作全 30 章におけるにおいの分布を検証したところ、第二巻後半第 22 章以降に全 253 回登場したうち 173 回ものにおいが登場し、大きな偏りが見受けられる。その時期は、第二次印パ戦争に巻き込まれ家族を失い、サリームの語りの断片化が加速する時期と一致する。魔術的リアリズムを駆使したスンドルバンの森の幻聴の描写や、パールヴァティの出産時に起きた数ページにもわたり一文でつづられる時空間が混濁した意識の流れの描写を経由した後、「真夜中」の章のはじめに、サリームは語りの源泉である記憶の断片化を訴えはじめる。強制断種のトラウマに苛まれたサリームは、「語りたくない、しかし全てを語らねば」と語ることに痛みを訴え、「記憶が割れ目に沈み、闇に吞まれ、断片のみしか残らず、何も意味はなさない」と記憶の断片化の加速を嘆く。この記憶の断片化を修復し、「スパイスで炒められた柔らかな何か」の臭いを語ることを可能にしたのは、23 章以降に集中した百を超える情動なのではないだろうか。なぜならば、においの情動にのみ、プルースト的な記憶の補填作用があるからである。多くのにおいの情動が緩やかにつながり、足し算的な増幅をして、サリームの今にも思い出すことができなくなりつつある記憶の修復をなしたといえる。

### 結

においという西洋近代化から周縁化された「下位」とみなされる五感に着目し、セジウィック的な情動の観点に立脚すると、本作には、「柔らかな言葉で表せない何か」の悪臭に潜んだポジティブな情動を起こしうるスパイスの匂いがあり、その中心的な情動をサリームに語らせるために数多の情動が記憶の修復を行っている結論づけられる。本作で中心的に扱った不潔なにおいは実は『悪魔の詩』でも重要な位置を占める。硫黄のようなジブリールの口臭は、飛行機事故を機にサラディンに移り、彼の悪魔化が進むにつれ強さを増し、最終的には再びジブリールに回帰する。今後の展望としては、この悪臭の情動とその他周縁にある情動との関係性を精査し、さらにラシュディ作品全般におけるにおいの情動を論じ切りたい。